

## オーロラ景気

オーロラが乱舞し北極圏を越えて南に広がる年は好景気となり、約十一年の周期で繰り返されるという。これが百年来、自然と景気との関係を調べた結果である。もう少し正確な表現を使うと、太陽活動には約十一年の周期で活発な時期がくるが、これに伴いオーロラがきわめて活発となる。時には北極圏を越えて南へドナツ上に拡大、南下するほどである。オーロラの活発さは太陽の黒点の数の多さで決まるが、その数の変動が世界の経済活動の活発さ、景気と運動しているのである。

黒点の数が極大となる年の前後が好景気となり、極小の年の前後に不況がやってくる。十一年ずつ年を追ってみると、黒点数の変化の谷底にあたる昭和五十一年頃、六十一年頃で不況となつており、遡れば昭和三十九年頃、一千八年頃と奇妙に十一年周期で不況の底がめぐつてしまっている好景気の例では昭和五十四年（一九七九年）について現在の「いざなぎ景気」の山にある今年が十一年目にあたる。とともに太陽の黒点の数の山にあたり、去年は今世紀の中で最も活発となり、三十年ぶりでオーロラが北海道の空を夕焼けのごとく彩り乱舞した

統計によると、株価も黒点数のピーコとの一年遅れで変動しているという。この太陽の活発さという自然のサイクルから予想すると、景気は

すでに山を越え、太陽の黒点の数の減少に伴つてゆるやかなに後退に向い、株価も下がるといいる。むろん実際はこの周期の一倍のおよそ一千一年の周期やエルニーニョの数年周期の変化が重なつて複雑にしているので単純にはそうはならないが、注意深く見ると大まかな線ではあつてゐるよう見える。

景気に密接にからむ太陽の黒点の数はほぼ峠をこえ、オーロラの活発さの行方が案じられる。オーロラはもともとギリシャ時代から「暗い天の裂け目から炎となって吹き出すガス」天の穴から燃える炎」とよばれ、語源はローマ神話における「火の星」の意味である。夜の星を追い払い、あけぼのを告げる女神である。まさに太陽を後ろ盾にして世界に好景気の恵みを与えてくれているにまさわしい伝説の女神である。しかし、その神通力にも「かげり」が見え始め、次の十年先の活躍までの深い眠りに落ち込みはじめたようである。自然の摂理かもしれないが景気の先ゆきが心配される。